3課

10月15日

人間の本質を知ること

安息日午後 10月8日

暗唱聖句

主なる神は、土（アダマ）の塵（ちり）で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。（創世記2：7、新共同訳）

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。（創世記2：7、口語訳）

今週の聖句

創世記1：24～27、創世記2：7、19、マタイ10：28、コヘレト12：1～7、列王記上2：10、列王記上22：40

今週のテーマ

「きっと死ぬであろう」（創2：17、口語訳）と言われた神の言葉と、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」（同3：4、口語訳）と言ったサタンの言葉の緊張関係はエデンの園に限ったことではありません。それは歴史の中で繰り返されてきました。

多くの人々は、サタンの言葉を神の言葉に調和させようとします。彼らにとって「きっと死ぬであろう」との警告は、滅びゆく肉体のみに関するものであり、「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう」との約束は、霊魂不滅の思想を意味するのです。

しかし、この論法は通用しません。例えば、相反する神の言葉とサタンの言葉が調和するでしょうか。肉体が死ぬ時、霊魂が意識を持った実体として残ることができるでしょうか。これらの問いに答えようと、多くの哲学的、かつ科学的な試みがなされました。しかし、聖書に基づくクリスチャンとして私たちは、人を創造された全能の神だけが、私たちを完全に知っておられる（詩編139編参照）お方であることを理解しなければなりません。ですから、聖書の中にのみ、私たちはこれらの重要な問いの答えを見いだすのです。

今週、私たちは、旧約聖書が人間の本質と人類の死の状態をどのように定義しているかを学びます。

日曜日　10月9日　「生きる者」

問1　創世記1：24〜27と2：7、19を読んでください。神が創造された人間と動物の間には、どんな類似点と相違点がありますか。創世記2：7は、人間の本質についてどのように述べていますか。

動物と人間は同じように「土のちり」から造られましたが、人間の形成は動物とは二つの点で異なります。第一に、神は人の肉体を形づくられ、「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創2：7）のです。人は生きる者となる前は肉体的な存在でした。第二に、神はご自分にかたどって、男と女に創造されました（同1：26、27）。

創世記2：7は、アダムの肉体に「命の息」が吹き入れられることによって、彼は「生きる者」（ヘブライ語で「ネフェシュ・ハイヤー」）となり、「生きる魂」（英語欽定訳）となったと説明しています。それは、私たち1人ひとりは、肉体から離れて存在する魂を持ってはいないことを意味します。私たち1人ひとりは、生きる者であり、生きる魂なのです。「魂」が、肉体を離れて存在することができる意識のある存在であるとする主張は、異教の思想であり聖書的な思想ではありません。この人間の本質を理解することが、広く受け入れられている霊魂の概念や、この概念の上に構築されたすべての危険な誤りから私たちを守るのです。

統一体としての人から離れては、人間のどんな部分も、意識を持つ存在として存在しえないのです。神は私たちを恐ろしくも不思議な方法で創造され、私たちは、聖書が実際に人間の性質について述べている以上のことを超えて推測すべきではありませせん。実際、生命の本質が神秘であるだけでなく（科学者たちは生きているということが何を意味するのか今も同意しておらず）、意識の本質はさらに神秘に包まれています。私たちの頭の中にある数キロの物質的組織（脳細胞と化学物質）である脳が、どのように思考や感情といった非物質的なものをつかさどり、作り出すのでしょうか。この概念を研究する者たちは、本当にわからないことを認めています。

生命は、なんという神秘でしょう。生命だけでなく、さらに偉大な神秘である永遠の生命という賜物が与えられたことを、なぜ喜ぶべきなのでしょうか。

月曜日　10月10日　「罪を犯した魂は必ず死ぬ」

問2　エゼキエル18：4、20（口語訳）とマタイ10：28を読んでください。これらの聖句は人間の魂の性質を理解するために、どのような助けとなりますか。

この罪の世における人の命は、はかなく移ろいやすいものです（イザ40：1～8）。罪に感染したままで永遠であり続けるものはありません。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです」（ロマ5：12）。死はもともと罪の結果であり、それは地上のすべての生命に及ぶものです。

このことについて、聖書は二つの重要な概念を示しています。その一つは、人類も動物も死ぬということです。ソロモン王が述べているように、「人間に臨むことは動物にも臨み、これも死に、あれも死ぬ。同じ霊をもっているにすぎず、人間は動物に何らまさるところはない。……すべてはひとつのところに行く。すべては塵（ちり）から成った。すべては塵に返る」（コヘ3：19、20）のです。

二番目の概念は、人の肉体の死は、その人の生ける魂（ヘブライ語で「ネフェシュ」）としての存在の停止を意味するということです。創世記2：16、17で、神はアダムとエバに、善悪の知識の木から食べることによって彼らが罪を犯すなら死んでしまうと警告しておられました。

この警告は繰り返され、主はエゼキエル18：4、20（口語訳）で、「罪を犯した魂は必ず死ぬ」と念を押されました。この言葉には二つの主要な意味があります。一つは、すべての人間は罪を犯したので、私たちは皆避けがたい老いと死の過程にある（ロマ3：9～18、23）ということ。もう一つは、この聖書的概念は、人の魂がもともと不死であるとする観念を無効にするということです。もし魂が不死であり、死後、別の世界で生きて存在するなら、結局私たちは本当の意味で死なないということにならないでしょうか。

これとは対照的に、死という難問に対する聖書の回答は、肉体のない魂が、天国や煉獄（れんごく）や、あるいは地獄へ移るというものではありません。イエスが命のパンに関する教えで語られたように、「わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させること」（ヨハ6：40）なのです。

なぜキリストの再臨の確かさは、初臨と同じように（結局、再臨がないなら、キリストの初臨に何の意味があるでしょうか）私たちの信仰に決定的なものなのでしょうか。再臨の約束なしに私たちに希望があるでしょうか。

問3　創世記 2：7 とコヘレト 12：1～7 を読んでください。これら二つの聖書の箇所にどんな対比が見られますか。これらの聖句は人間の死の状態について理解を深めるためにどんな助けとなりますか。創世記 7：22 も参照してください。

すでに学んだように、聖書は、人の存在は生きる魂であり（創2：7、口語訳）、肉体が死ぬ時、魂は存在しなくなると教えています（エゼ18：4、20）。

では「霊」はどうなのでしょうか。肉体の死後も霊は意識ある実体として残るのでしょうか。多くのクリスチャンは残ると信じており、コヘレト12：7の「塵（ちり）は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」を引用して、自分たちの考えが正しいことを正当化しようとさえします。しかしこの聖句は、死者の霊が神の御前で意識あるものとして残ることを意味するものではありません。

コヘレト12：1～7は、きわめて劇的な言葉で老いとその頂点にある死を描写しています。7節は、創世記2：7で触れた創造の時とは正反対のことが死ぬ時に起こることを言及しています。すでに述べたように創造の週の第六日に、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」（創2：7）のです。しかし今、コヘレト12：7は、「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」と言います。神がアダムの鼻に吹き入れられ、他のすべての人間に与えられた命の息は、神に帰ります。別の言葉で言えば、命の息が吹き入れられなくなるのです。

コヘレト12：7は人類すべての死の過程を描写しており、その過程に義人と悪人の区別のないことを、私たちは覚えておくべきです。もし死んだすべての人の霊が神の御前に意識ある存在として生き残るとすれば、悪人の霊も神と共にいることになるのでしょうか。このような考えは聖書の教えに調和しません。なぜなら、人間にも動物にも同じ死の過程が臨み（コヘ3：19、20）、死は生けるものとしての存在が終わること以上の何ものでもないからです。詩編記者が言うように、「御顔を隠されれば彼らは恐れ／息吹を取り上げられれば彼らは息絶え／元の塵に返る」（詩編104：29）のです。

私たちはよく、死は人生の一部にすぎないと言います。なぜそれが間違っているのでしょうか。死は命の反対であり、命の敵です。それならば、「最後の敵として、死が滅ぼされます」（1コリ 15：26）という御言葉は、なんと大きな希望でしょうか。

水曜日　10月12日　「死者はもう何ひとつ知らない」

問4　ヨブ3：11～13、詩編115：17、詩編146：4、コヘレト9：5、10を読んでください。これらの聖句から人間の死の状態について何を学ぶことができますか。

ある聖書注解者は、これらの聖句（ヨブ3：11～13、詩編115：17、詩編146：4、コヘ9：5、10）は詩的な表現であり、人間の死の状態の定義として用いるべきできはないと主張します。確かに詩はあいまいな表現があり、誤解されやすいのは事実です。しかし、これらの聖句はそのような事例には当たりません。その言葉は明快であり、その概念は死という主題において、旧約聖書全体と完全に調和しています。

第一に、ヨブ記3章で、父祖ヨブは、すべての苦しみのゆえに自身の誕生を嘆き悲しみます（彼より悲惨な経験をして自らの誕生を呪った人はいるでしょうか）。彼は、自分が生まれたときにすぐに死んでいたら、眠ったままで安らかであっただろうと考えています（ヨブ3：11、13）。

詩編115編は、死の状態を沈黙の場所と定義しています。なぜなら、「主を賛美するのは死者ではない」（詩編115：17）からです。忠実な（そして感謝に満ちた）死者が天で神を礼拝しているとは決して考えられません。

詩編146編によれば、個々の精神的活動は死と共に終わります。「霊が人間を去れば／人間は自分の属する土に帰り／その日、彼の思いも滅びる」（詩編146：4）からです。これは死によって起こることの完璧な聖書的描写です。

コヘレト9章はさらに、「死者はもう何ひとつ知らない」、そして墓の中では、「仕事も企ても、知恵も知識も、もうないのだ」（コヘ9：5、10）と付け加えます。これらの言葉は、死者は無意識であるという聖書の教えを裏付けています。

死後無意識になるという聖書の教えは、クリスチャンにいかなる恐れも起こさせるものではありません。第一に、救われずに死んだ人には、永遠に燃える地獄も一時的な煉獄も待っていないのです。第二に、キリストにあって死んだ者には、驚くべき報いが待っています。「信じる者には、死は小事にすぎない。……クリスチャンにとって死は眠り、一瞬の沈黙と暗黒にすぎない。生命はキリストと共に神のうちにかくされ、『キリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に栄光のうちに現れるであろう』（コロサイ3：4）」（『希望への光』1092ページ、『各時代の希望』下巻318ページ）ことは不思議ではありません。

問5　創世記 25：8、サムエル記下 7：12、列王記上 2：10、22：40 を読んでください。これらの聖句は、あなたの死の理解に何を付け加えますか。

旧約聖書は異なる方法で死と埋葬についての概念を表現しています。その一つは、先祖の列に加えられるという考えです。例えば、私たちは「アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた」（創25：8）と教えられており、アロンとモーセもまた彼らの先祖の列に加えられました（申32：50）。

問6　良い王も悪い王も死ねば同じ場所に葬られた事実は、私たちに死の性質について何を教えていますか（王下 24：6、代下 32：33）。

もう一つの死の描写は、先祖と共に**眠りについた**というものです。ダビデ王の死について、聖書は、「ダビデは先祖と共に眠りにつき、ダビデの町に葬られた」（王上2：10）と言います。同じ表現が、忠実な王にも不忠実な王にも、何人かの他のヘブライの王たちにも用いられています。

先祖たちと共に眠りにつくことについて、少なくとも三つの重要な意味があります。第一は、遅かれ早かれ、人は骨の折れる仕事や苦しみを離れて休むべき時を迎えるという考えです。第二に、私たちはそのような望まぬ道をたどる最初の人間でも、唯一の人間でもないということです。先祖たちもすでに経験したからです。第三に、先祖たちの近くに葬られることによって、私たちは死んで無意識であっても１人でなく、彼らと共にいることができるということです。このことは、現代の個人主義文化にとってはあまり意味を持たないかもしれませんが、古代においては、非常に意味のあることでした。

キリストにあって死んだ者たちを、彼らの愛した者たちと共に葬ることはできますが、彼らが互いに意思を通わすことはありません。彼らは、深い眠りから目覚め、キリストにあって死んだ愛する者たちと再会する栄光の日まで、無意識のままなのです。

金曜日　10月14日　さらなる研究

参考資料として、『各時代の大争闘』第33章「人は死んだらどうなるか」を読んでください。

全身麻酔で手術を受けたことがある人は、死者がどんな状態なのか、なんとなくわかるかもしれません。麻酔下にあっても、あなたの脳は機能しています。脳の機能を含めすべてが完全に停止する死が、どのようなものか想像してみてください。その時、目は閉じられ、かつて生きていた彼らが、次に目覚めるのは再臨の時か、イエスが千年期後に再びおいでになる時か、どちらかなのです(黙20：7～15)。その時まで、すべての死人は、義人も悪人も、彼らにとっては一瞬である眠りにつきます。生き残る者たちにとって、死は長い時間のように思われますが、死者にとっては一瞬にすぎません。

「もしだれでも、死ねばすぐその魂が天に行くのなら、生きているよりは、死んだほうが望ましく思われることであろう。こうしたことを信じた結果、自分の生命を断ったものも多いのである。困難や悩みや失望に陥った場合、もろい生命の糸を断ち切って、永遠の世界の幸福へと舞いあがることが、いかにもやさしいことのように思われるのである」(『希望への光』1860ページ、『各時代の大争闘』下巻289ページ)。

「死ねば、義人は天に行き、悪人は罰せられるというようなことは、聖書のどこにも書いてない。父祖たちや預言者たちは、そのような確証を残さなかった。キリストと弟子たちは、そのような暗示は何も与えなかった。死人は、すぐに天に行くものではないと、聖書に明らかに教えられている。彼らは復活まで眠って いると記されている」(『希望への光』1865、1866ページ、『各時代の大争闘』下巻302ページ)。

話し合いのための質問

❶ 意識は統一体としての人間にのみ宿るという聖書の概念は、死の性質の理解にどのような助けとなりますか。

❷ 世界は、霊魂不滅の思想によって支配され、多くの悪影響を受けています。なぜ今、死の状態についての私たちのメッセージが重要なのでしょうか。なぜクリスチャンの中にさえ、このすばらしい教えに反対する者がいるのでしょうか。

❸ 死の状態の理解は、私たちの目の前に「現れる」ものから私たちをどのように守りますか。私たちはなぜ、見るもの聞くもの、特に死んだ親族の霊を見たという話を信じてはならないのでしょうか。

すべての１セントは聖なるもの

110.52ドルの２枚の郵便為替と共に封筒に入っていた手書きのメモを読んだシャマラは目を見張りました。その手紙はアメリカの東海岸から届き、郵便為替は、まだ伝道が行われていない地域で、宣教師たちが信徒による伝道チームを発足する働きを助けるグローバル・ミッションのために捧げられたものでした。

「人々が神様の愛を学ぶことを助けるために、グローバル・ミッションへの寄付を送ります。私は神様を愛し、隣人に福音を広める助けをしたいのです」と手紙に書かれていました。グローバル・ミッションの寄付金対応部門で働くシャマラを驚かせたことに、110.52ドルは、この支援者が道で発見した１セント硬貨を瓶一杯にため、それを郵便為替に換えたものだということでした。「この贈り物は、私がイエス様のために集めた硬貨です。あなたが神様の愛を伝えることで、誰かに笑顔がもたらされることを願っています」と、支援者の女性は手紙に書いていました。

もう一つの驚くべき手紙が数週間前に届きました。アメリカ西海岸から届いたその手紙には、何のメモも入っていませんでした。しかし、同封されていた165ドルの小切手は、多くを物語っていました。小切手は、受刑者のために刑務所で発行されたものだったのです。受刑者が月に55ドル稼ぐとすれば、少なくとも3か月は働かなければならない金額でした。「しかも、これは彼の初めての寄付ではないのです」と、シャマラは言います。

三つ目の手紙は、シャマラと共に働くニムファによって開封されました。その手紙は、数日前に、ウェブサイトを通して行った寄付が届いているかを確認するために電話をかけてきた男性からのものでした。ニムファは、銀行が彼との取引を拒否していることを知り、小切手か電信送金による寄付を提案しました。すると、数日後に7万ドルの小切手が届いたのです。その寄付は、不動産の売却利益でした。「その男性は、もし不動産が売れたら、すべての利益をミッションのためにささげますと、神様に約束したのです」と、ニムファは言いました。

神様の使命に対する人々の忠実な物語は、グローバル・ミッションで奉仕する人々の心を深く感動させています。「私たちが受け取るどの１セントも、普通の１セントではありません」と、ニムファは言います。「なぜ募金が送られてきたのかを知るとき、どの１セントも聖なるものであることを思い知らされます。それは主のお金です。１セント残らず、イエス様が早く戻られるよう、宣教の働きを完成させるためだけに使われるのです」（アンドリュー・マクチェスニー）